



序

その他のタイトル	Vorwort
著者	見次 直雄
雑誌名	独逸文学
巻	23
発行年	1979-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017785

序

道家忠道教授は本年度中に満七十歳に達せられましたので、本年三月末日をもって本学を定年退職されることになりました。そこで本号をその記念号とした次第であります。

かえりみますに、教授を本学にお招きする際に、その衝に当られたのは齋藤、丸山両教授でした。それから早くも六年が経過してしまった訳ですが、まだ二三年のように思われてなりません。教授は東京大学教養学部で定年の後、京都の鹿ヶ谷のほとりに学究生活を続けておられたのですが、我々の懇望を容れられて本学へおいで下さったのであります。本学では学部専門科目と大学院だけが担当ねがいましたが、我々後進のご指導ご鞭撻にもひとかたならぬご心労をおかけいたしました。感謝にたえない次第であります。しかし教授には関大ご通勤が事前のご不安に反して、むしろ健康増進剤になったと言って戴いて、我々としては安堵の胸をなでおろした次第であります。幸いにして今後も非常勤としておいで下さる由、どうぞご健康に留意くださって、益々わが国ドイツ文学界のためにご貢献くださるよう、また我々の独逸文学会のため変らぬご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。教授のご健勝を切に祈念いたします。

昭和54年 3月

関西大学独逸文学会会長

見 次 直 雄